

# 「女今川」 成立考 — 女子用往来の写本と刊本 —

安 田 千恵美

キーワード

女子用往来 写本 女筆 「女今川」

はじめに

近世は、書物が大量に制作・出版され、それにより一つの社会の共通理念を形成するに至る文化上の画期である。書物・出版が媒介する知はいかなる歴史的役割を果たしたのか、このような〈書物・出版〉と「社会」<sup>①</sup>との相互関係の諸相を追求するという研究潮流がある。かかる近年の動向を受け、女性向け書物についても、その内容分析に留まらない執筆・出版意識に着目する研究や商品として書物を捉え考察することの必要性の提唱<sup>②</sup>などが現れ、分析視角を多様化しつつ、女性向け書物研究の今日的水準は深化を遂

げている。

しかしながら、その分析対象とされている書物には偏りがあり、これまでの研究史上では近世の女性向け書物と言えば、その代表的作品として「女大学」の名がまず挙げられる。多くはこの「女大学」を中心に、近世的女性像・女性向け教訓の世界が描かれていたと言ってよいだろう。これは貝原益軒の名を借用し、益軒著作である『和俗童子訓』の一部である「教女子法」を、大坂・柏原屋清右衛門が改変し、出版した『女大宝箱』を初発とする一群の書物を指す。『女大宝箱』の本文部分のみを以って「女大学」総体を語り、近世的女性像を論じるという営為が、『新

「女今川」 成立考 — 女子用往來の写本と刊本 — (安田)

女大学』を著した福沢諭吉以来、いわゆる「女訓書」研究の主流であったと見てそう間違いはあるまい。<sup>⑤</sup>無論「女大学」の位置付けの如何は今後も問われて然るべき論点であるが、近世に夥しく出版された女性向け書物を語る際に、他の女性向け書物との比較の視点があってもよい筈である。「女大学」以外の書物の検討は、これまでの「女大学」研究の蓄積を相対化する試みでもあり、近世女性像及び女性を取り巻く社会像の再検討を促すことになるだろう。

近年、女性向け書物の総体の再検討を促すことになるだろう。近年、女性向け書物の総体が窺える資料集や目録の刊行が続き、研究環境は飛躍的に整備されつつある。その中でもとりわけ「女今川」は出版数が多く、総体的な分析が可能な史料である。にも関わらず「女今川」については、解題や論文内に一部取り上げられるのみで、散発的に述べられるに留まる。先行研究でも、一史料群としての近世史的な意義を明らかにするような体系的な研究が欠如し、この点が大きな課題となっている。

そこで従来、近世において「最も愛好された女訓書」との評価がなされていながらも、その実態については未だ謎の部分の多い「女今川」に着目し、本稿ではその本文の成立過程と展開過程を概観し、作者は誰であったのか、また、その執筆意識について考察を試みるものである。

## 一、研究史の「女今川」

「女今川」とは如何なる書物であったのか。「女今川」は、近世において最も版を重ね、確認されている限り一七四種以上に上り、再板を含めると二九五種も刊行されている近世における女性向け書物のトップシェアを誇る往來物であった。参考までに「女大学」の場合は、一〇一種、再板含め二一三種であるが、これは明治期に刊行されたものも含まれるため、近世に刊行された「女大学」はこれよりやや少なくなる。このような女子用往來の中でも突出した二大勢力と言える両書は、女子用往來の中でも特に「教訓型」と分類される。<sup>⑩</sup>

従来の研究史では、「女今川」の内容面については、「形式的で教訓内容に変化が乏しく、「女大学」の隆盛以降存在感が希薄になる」というような評価が石川松太郎氏により下されて以降、三〇年以上も進展をみせていない。

「女今川」の形式は、多くが大本ないしは半紙本であり、二〇丁程度の薄手の書物である。「女今川」の撰作者も撰作年代も不明である。体裁は、同じく普及した男子用の「今川状」と同じく禁止条項の列挙、家訓ないしは壁書の形態を採るが、これは「女今川」が「今川状」の派生作品であるため、基本的に「今川状」の基本ラインを崩さぬ形で女

子用に書き換える必要があったからである。そのため女子用に仮名交じりの和漢混交文ではあるものの、一条は一五字から二五字程度の短い文章から成る全二三条の条目と婦道の綱領を示した後文で構成されたものが基本形である。さらに刊本「女今川」の多くは付載記事を有し、本文以外の記事により各書肆は各々の「女今川」の特色を出すことが可能となった。例えば挿絵の多くはこの付載記事部分に含まれるし、細々とした情報をこれら付載記事によって学ぶことができるようになっていく。「女今川」の付載記事は「女大学」のそれに比して紙面が少なく、必要最小限に留まるものが多い点も特徴の一つである。

「女今川」本文の内容については、現在のところ大きく四系統に分類される。①第一類…いわゆる貞享板系。その初発とされる貞享四（一六八七）年刊行の『女今川』の本文を中心としたもの。内題が「今川になぞらへて女いましめの條々」のもの。②第二類…いわゆる元禄板系。元禄一三（一七〇〇）年刊、『絵入女今川』と同じ本文系統のもの。内題が「自を戒む制詞の条々」であり、作者は沢田きち。石川松太郎氏によれば、この元禄板こそが「女今川」の主流をなしており、後世、「女今川」と称されているのは、おおむねこの類の往来を指していると考えてさしつかえない、としている。③第三類…貞享板・元禄板の双方から任

意の部分を探り一巻としたもの。厳密に分類を行えば、この第三類が最も多くなると思われる。④異種「女今川」…条目数や形態は同じであるものの、内容面が全く新規なもの。例えば『女用躰今川』や『芸妓女今川』というような諸本が挙げられる。「女今川」の派生作品とも言えるだろう。これらの「女今川」本文の違いについて、右のように言われてはいるものの、石川氏は、「教育理念ではならん変更するところがなかった」と結論づけている。繰り返しになるが、「女今川」本文の作者・成立年代は不明である。従って本稿では、史料の検討を加えることが可能な①貞享板系、及び②元禄板系の両書の成立過程に留意しながら、本文内容・表現の分析を試みる。

## 二、「女今川」の成立について

女子用往来の研究は刊本を中心に行われており、全国に散在する膨大な写本の状況把握にまでは至っていないのが実情であるが、今回の新たな写本史料の紹介により、「女今川」の成立について新知見を得ることができると考える。そこで、以下その紹介を行いたい。なお、本稿末尾に金沢市立玉川図書館所蔵本である写本『女今川』の翻刻を掲載した（以下金沢図本と略す）。

「女今川」の成立について、従来刊本重視の研究では殆ど顧みられなかった写本の検討により、明らかにし得るところがある。金沢図本写本『女今川』は、これまでの「女今川」の初発とされる貞享四(一六八七)年より以前のものである。結論を予め述べるとするならば、「今川状」の女性向け改作である「女今川」は写本の形で巷間において成立していたものを商品化・出版したものであり、初めから商品として生み出された書物ではない、ということである。

次に、金沢図本「女今川」の史料情報を概観する。形態は、写本の折本一冊であり、折本の「女今川」は比較的珍しい(袋綴じ装が一般的)。折本は本来、書道手本として使用する形態である。金沢本の形態が折本であることと、後述するように、作者が入木道であることから、「女今川」の本来の性質は、習字手本であり、女性向けの手本として使用されるべきものである、ということを示している。成立年は、貞享二(一六八五)年とあり、管見の限り刊本が出版される以前のものとしては最も古いものである。写本の製作者は、尾坂下松平家家臣・福田平左衛門という人物で、彼は、金沢片町在、奥方御膳所御横目、百石の武士である。さらに本史料には、この「女今川」の本文制作者と思しき人物の名が記載されており、それは菖寿亜槐三十世

入木道相承源成章なる人物であった。源成章が如何なる人物であるかについては不明ながらも、いずれにせよ写本制作者・「女今川」作者共に男性であるという点が示唆的である。それは次の内題にも表れている。内題は、「今川になそらへて女いましめの條々」というものであるが、これは、他者—おそらく男性であろう「女今川」の筆者—が女性を「いましめ」という伝授者・享受者構造が端的に表されていると言つてよい。

内容面は、後世に広く流布した貞享板系の本文とほぼ同じ型のものであるが、多少の異同が認められる。そのため貞享板『女今川』<sup>②</sup>との比較から金沢図本『女今川』を考察していく。

貞享板『女今川』とは前述の通り、刊本「女今川」群の初発とされるものである。形態は刊本、二巻二冊(一五丁・一三丁)、大本であり、刊行年は貞享四(一六八七)年と金沢図本『女今川』に遅れること二年である。書肆は福森平左衛門。福森屋が当時上方で著名な女筆家の窪田つなに書筆を依頼し、刊行した。窪田つなとは、大津在、窪田宗保孫であり、窪田家はやす・つな・つると三代にわたり書家を輩出した著名女筆家の家であったようである。製作背景についてはわずかながら跋文に「此女今川、都にはよろしき女筆あまたおはしますへければ、其憚おほかれといな

みがたき。仰により写し参らせ侍るのみ。」とあるだけだが、少なくとも「女今川」本文が新造されたのではなく、既に存在しており、つなはそれを元に「写し」、つまり版下書きをしたことが分かる。ここから写本として上方を中心に「女今川」が広まっていたのではないかと考えられるが、どの程度の広がりを想定するのかについては、今後の写本の発掘・蓄積を待たねばならない。ちなみにこの福森平左衛門の「女今川」板権は、後に一福森屋の活動期間から宝永期（一七〇四年）以降かと推測される一京都書肆・菊屋七郎兵衛へ移っていく。

これら写刊本両書の内題は「今川になぞらへて女いましめの條々」で共通である。本文もほぼ同文でありながらも、若干の異同が認められる。以下、貞享板系との本文比較により、貞享写本『女今川』の特徴を見ていく。

まず、貞享刊本は平易さを旨とした読み方の確定を行っている。具体的には、金沢図本では「一、人の中言を企て愁を以身をたのしむ事」という条目を、貞享刊本では「一、人の中ごとを企て人の愁を以て身を樂事」というように変化させてある。ここでは人の中傷をし、その人の愁いを自らの楽しみとしてはいけない、ということ、その内容に違いはない。では、このような教訓内容には関わりのない差異には、如何なる意味が存在するのか。それはおそらく

読み下しの問題であろう。特に金沢図本のような写本の場合、多くはルビがふられておらず、どう読み下すかの判断が難しい場合もある。刊本の多くの「女今川」では、ルビがふられているため、このような読み下しの困難さは克服されているが、貞享刊本『女今川』のような初期刊本の段階ではルビはあまりない傾向である。そのため、読み下しが紛らわしい箇所については、「中言」を「中ごと」のように記す等といった配慮がみられる。これが平易さを旨とした読み方の確定につながっている。

僅かではあるが、教訓内容の異なるものも見られた。金沢図本では「一、人の悲を見るを以我知有とおもふ事」とある条目が、貞享刊本では「一、人の非を見るを以て我知有と思ふ事」となっている。ここでは「悲」が「非」と書き換えられている。教訓内容の、己に知ありと慢心する前提が、他者の「悲」から「非」へ変えられている。これは貞享刊本の方が筋としては妥当であろう。分かりやすさを旨とした改変である。

貞享二（一六八五）年の金沢図本『女今川』は、「女今川」がその初発の段階においてそもそも商品として生み出された書物ではなく、写本として流布していた可能性が濃厚であることを教えてくれる。この事実は、「女大学」の初発である『女大学宝箱』が柏原屋清右衛門により商品として

「女今川」 成立考 — 女子用往來の写本と刊本 — (安田)

生み出された書物であるという事実と比較すると、明らかにその成立過程を異にしており、示唆的である。

「女今川」 成立は写本としての成立が先行し、隆盛しつつある出版文化の潮流に乗り、出版されたのである。つまり、女を対象とした「今川状」を必要とする社会的土壌が近世当該期に存在していたことだろう。この金沢図本により「女今川」の前期写本の具体的実相を窺うことが可能となった。「女今川」刊本が出版される以前の写本としての広がり、流布の程度の一端が明らかとなった。おそらく京都を中心とした文化圏から、「今川状」のヴァリエーションの一つとして生み出され、受容されたものが「女今川」の初発の形なのだろう。「今川状」から「女今川」が生み出されたように、様々なヴァリエーションを生み出していく多様化の営みこそが近世の出版の特徴的営みであると筆者は考える。その後「女今川」は、更に多くのヴァリエーションを生み出す母体となってゆく。従来の刊本偏重の研究では、女性向け書物の成立に迫っていくことは限界があった。今後とも更なる写本の発掘が望まれる。

### 三、「女今川」の改作

「女今川」が「今川状」の派生作品であるように、「女今

川」本文も改作され、新たな派生作品が生み出された。外題は同外題ながら、内容面にも新たな意識をもって書かれたものが元禄板系と呼ばれる一群の「女今川」である。この元禄板の出現により「女今川」は進化を遂げる。

元禄板系統の初発は『絵入女今川』<sup>28)</sup>である。形態は刊本、二巻二冊(一二丁・一二丁)、大本。刊行は元禄一三(一七〇〇)年、江戸の書肆・伊勢屋清兵衛、板木屋新助の相板として出版された。また、初めて本書から挿絵が付されている。この「女今川」もこの時期の多くの女子用往來と同じく女筆家の手により書かれており、当該期の女性向け書物の傾向とほぼ軌を一にしている。女筆家の活発な活動期は万治〜宝暦期(一六五八〜一七六三)<sup>29)</sup>とされており、この時期の「女今川」には女筆手本としての性格が後のものより強く出ている。貞享板は用文章形式を採り、元禄板は一部手本形式を採り、その女筆としての芸術性に差はあるもののその後主流となる御家流の書体と比すれば雲泥の差と言わざるを得ない。書筆は、主として並べ書きだが一部散らし書きを用いるといったやや変則的な書となっている。元禄板『絵入女今川』の書筆を担当した女筆家の一人である沢田きちは、前述の窪田つなのように美しい字で写すという役割を超えて「女今川」本文の改作も担当しており、まさに元禄板の作者と言える。沢田きちは、京都

在で、元禄期に活動した女筆家であり、きちの手になる書物として『女筆四季の友』、『女筆浅香山』、『お吉ちらし文』など八点が知られるもの、その生涯と活動については不明の点が多い。そのきちの「女今川」執筆意識が窺える序文が【史料1】である。

【史料1】

此比有人の書し女今川をみるに、むかし貞世朝臣のしるしをかれし筆のすさ見に、なぞらへて、まのあたりいましめの品々を顕せり。其ことむべなるかな、しはしも是にはなれては、あふもの物いひ狸々の能ことをのぶるにおなじと、心にせまりて、いとほつかしく覚へ侍る。よくあぢはひて、是によらは、きのふのひかめるを改、今日はすなほなる道に趣へし。然るに、今また改かふる事は、全我言をよしとすにあらず。自かたましき所をひそかにしるして、朝な夕なに見たらむは、聊心さしの直をあげまかなるを、おくのたすけにとおもふのみ。誰へもたえず心にかへり見、勤は夫婦の道むつましく、縦はあめつちのをだやかに四季の各時をしるにかなひ、家と、のほり、身おさまり、ほまれは四方にみちて、なかく子孫に残るへし。

錦のしとね、つちくれの枕、貴賤の品は、異にしてつゝ

しむ所なんぞことならんや。

沢田氏の妻

きち自序

ここには「此比有人の書し女今川をみる」とあり、先行して出版された貞享刊本『女今川』ないしは写本により流布している「女今川」等の浸透を窺わせる。

きちの改作意図は内題に端的に表されている。従来の貞享板系の「今川になぞらへて女いましめの條々」から、「自を戒む制詞の条々」と書き換えられた。これにより読み手である女性が自らの内面を見つめ、「女の道」にふさわしい自己を形成することを目指している。単に礼儀や行儀作法を守るのみならず、その心の内実を規制し、よりよい女性たらんとする意識面への転換が窺える。

では、沢田きちの改変趣旨を見てみよう。貞享板との条目比較によりきちの目指す「いましめ」の具体例を追う。

まず、全体的に文章が女性化し、和語を使用するようになる。貞享刊本では「一、常の心ざし無嗜にして女の道不明事」というところが、「一、常の心さしかだましく女のみち不明事」と書き換えられている。これは、この条目が「女今川」の一条目であることも相俟って象徴的である。

貞享系の漢文調を改め、「無嗜」を「かだましく」としているが、これは漢文で書かれている「今川状」からの更なる乖離を意味する。

教訓内容としては、「無嗜」のように身体の表面に出てくる行動を規制するものから、「かだましく」のように心のあり方を規制するものへ改変された。これにより、読み手である女性が自らの内面を見つめるといふ新たな視角を持ち込んだ。

更に跋文にも「貴賤の品は、異にしてつゝしむ所なんぞことならんや」と、対象としている読者身分においても広範囲化傾向がみられる。貞享板では「一、主親の深き恩を忘て忠孝疎になる事」であった条目は、元禄板では「一、父母の深き恩をわすれ孝の道おろそかになる事」と改変される。「主親」「忠孝」が「父母」「孝」へ書き換えられているが、これは主君を持つ武家女性からより広い対象へ拡大を図ったものである。これと同様に、貞享板では「然は兼てよめたる道を教なくしては、夫の心に背て一門の恥をなさん事、いかばかり物うかるへし」と、武家女性を想起させる「一門」の表現と、女性同士「和き、一族のしたしむは正しき行なる」とし、親類間交渉を担う女性の立場——比較的高い身分の女性が想起させる設定——が示されたものから、元禄板の「朝な夕な孝行を尽して、毎事父母の心

に順なる事第一の事也」というように、武家に限定されない多様な階層におけるイエ中心の単婚小家族像を対象とする方向への書き替えが行われている。つまり、きちは、社会的背景として、イエの内実の変化に女性を取り巻く社会変容に対応した本文の改変を、出版を前提として行ったということである。付言すれば、これも「今川状」「一、令忘却君父重恩、猥忠孝事」<sup>33</sup>から、一段と乖離するものである。

他にも、元禄板では、夫婦の和合に重点が移動し、下僕や他人に対する心得を割愛する、貞享板の天地・孝行・五常・仁といった徳目が天地・心素直・夫敬うへと変化する、儒教的思想を希薄化し、抽象的な表現を極力排除する等かなり自覚的な改変となっている。

特に「心さし」については、「心すなほ」「心かだまし」というように強調されている部分である。女性の心のあり方でもっとも理想的とされているものが「すなほ/直」なのである。これは貞享・元禄板両系統の「女今川」全体を貫く思想であると筆者は考えている。

きちの『絵入女今川』の書き換えにより、「女今川」は新たな読者層の獲得を可能にした。このようなきちの書き換えが如何に画期的な試みであったかについては、その後出版された「女今川」<sup>34</sup>諸本のうち、きちの「女今川」本文を採用したものの外題が『新女今川』<sup>35</sup>『新女今川姫小松』<sup>36</sup>



などと銘打たれ、新しい「女今川」であることが強調され販売されていることから窺える。と同時に、少なくとも元禄十三（一七〇〇）年の段階で、「女今川」と言えば貞享板系の本文が（普通の一般的な「女今川」）であるという共通認識が形成されていたと推測される。

ところで、きちの『絵入女今川』の商品価値は、本文の変更の新しいさにあつたのか、女筆家としての知名度とその習字手本としての完成度にあつたのか、という問題が残されている。周知のようにきちは女筆家として名高く、そのため元禄板が売れ、定着したことの背景には、つな筆という点に価値があつたのではないか、という疑問が拭い切れない。そのため、元禄板を引き継ぐ「新女今川」ものの諸本の書筆を検討したところ、二つのパターンが存在した。一つは、『絵入女今川』の挿絵丁を省き、二冊の形態から一冊全へと変更し、板木はそのまま使用（板権の移動、乃至はかぶせ彫りかと推定される）し、板行した刊年・書肆共に不記の『新女今川』である。これは、きち筆であり、元禄板の純粹な後継本と言える。もう一つは、『新女今川姫小松』、『新女今川姫鑑』である。『新女今川姫小松』は、正徳四（一七一四）年に江戸書肆・西村伝兵衛により刊行されたもので、つな筆の散らし書き形態とは大きく異なる定型化した並べ書きで書かれている。また、同年に同板木

によると思われる同外題の書が少なくとも他に三種確認され、盛行した。が、いずれも並べ書きであり、二巻二冊の形態を採るか、一巻全としているか、程度の違いしかない。それより後年に出版された『新女今川姫鑑』は、明和八（一七七二）年、江戸書肆・山崎金兵衛により刊行された。これは、元禄板「女今川」と同文でありながら、書筆は全く異なる。なお、本書の本文部分は、板木は異なるが構成は『新女今川姫小松』と同一である。本書にはそれ以外にも多くの付載記事があり、最早元禄板本文の新鮮さだけでは出版競争の中で勝ち抜いていけず、他書肆出版の「女今川」との差異化を図ることが困難になってきていることが見て取れる。つまり、「新女今川」の言わんとするところの「新」とは、やはり文面の新しいさに即して名付けられたものであり、習字手本としてのつなの女筆をそのまま踏襲するものではないことから、つなの『絵入女今川』の成功の比重がどちらにあつたかについては明らかである。

また、型式も元禄板から大きく変化した。貞享板・元禄板共に女筆手本型式であり、本文以外の記事は短い序跋文のみという比較的簡潔なものであつた。これに元禄板（一七〇〇年）は、挿絵を八葉つけている。この挿絵は菱川師宣画と推定されている。この事例のように「女今川」には著名絵師・画工の手による挿絵が比較的多く、挿絵が

「女今川」 成立考 — 女子用往來の写本と刊本 — (安田)

「女今川」商品価値の大きな部分を占めたと考えられる。その後の「女今川」は、前述の正徳四(一七一四)年『新女今川姫小松』により型式が変化し、頭書が付く。これは同年に他書肆から五種以上の重板・類板本が出されるほど盛行した。享保元(一七一六)年には挿絵・前付・頭書・後付の揃う大部な付載記事を有する『女大学宝箱』が出版された。この『女大学宝箱』のインパクトを如何程受けたかは推測するしかないが、この後享保十(一七二五)年刊、江戸・伊勢屋清兵衛板『女今川ちとせの鶴』以降多くの「女今川」の付載記事が増量する。ここに前付・頭書・後付という付載記事を有す、所謂「女子用往來」として想起されるスタイルが定型化するのである。「女今川」「女大学」の事例から、この型式の変化は享保期が画期と言える。

#### 四、「女今川」の広がり

近世を通じ「女今川」は、これまで紹介した貞享板系・元禄板系の本文が両系統併存状態でその後も出版され続けるが、「女今川」の本文には、次第に貞享板・元禄板の任意の箇所を混交させたハイブリッド型が出現するようになる。このハイブリッド型はヴァリエーションが多彩であるため、本文から一定の傾向を導き出しにくい。更に多くの

場合は既に「女今川」が女子用往來のトップシェアとなり、改めて本書のアピールの必要性が感じられないようになって時期以降の出版のため序跋文を有さず、出版意識を書物そのものから読み取ることも困難である。このようなハイブリッド型本文を作ることの意義は、時代に合わせた改編、その書肆の特徴を出すための改編、などが考えられるだろう。

ハイブリッド型には、習字手本としての基本的な役割に加え、「見て楽しむ」ことを売りにした『絵本女今川』のようなものがある。これは葛飾北斎画の全一四葉の、挿絵レヴェルとは到底言えない程の美しい絵が付された「女今川」である。書肆は名古屋・永楽屋東四郎ほか三都一二書肆。刊行年は不記ながら恐らく弘化年間(一八四四年)以降かと推測される。判型は半紙本、全二九丁。内題は、「今川になぞらへて女子をいましむる制詞の條々」であり、これは貞享板に近い趣意ながらも異文である。本書は「女子」をいましめるとあるように、その対象が貞享板系の「女」より、低年齢の「女子」を対象としたことが読み取れる。これは絵本という性格上、読者層もそれにふさわしい年齢にする必要性があったためである。本史料が半紙本の体を採るのも同様の理由によるものであろう。

本文も内題と同様に、貞享板本文に拘ることなく両系

統を組み合わせており、更に本書オリジナルの条文さえ出現している（とはいえ多少の異同に留まる）。後文は、貞享板系と元禄板系双方から抜き出し、順序を入れ替え作成されているが、前半部は主として元禄板系から採られ、後半部は貞享板系から採られている。

内容面の変更については、行いや心ざしを「正しく」あるべきと説く貞享・元禄板の文言に替えて、「直」―すなお―の徳目を置き、強調している。具体例を一つ挙げれば、自らの心の善悪を知ろうとする時には、友人親類縁者などを家に招き、その友人らの反応如何により判断すべし、との一文があるのだが、これが貞享板では「招共うとみをとつれなき時は、我行正しからずとしるへし（傍線部引用者）」というところを、このハイブリッド型の場合は、「又招くとも疎みて来らざる時は、わが行ひの直ならざるとしるべし（傍線部引用者）」としている。このように単語を一つ置き換えるだけでも（むしろ一つの単語の置き換えのように極力本文の原型を崩さない形で書き替えをせねば「女今川」から逸脱してしまうため、このような形を取らざるを得ない）、教訓の意味合いは大きく異なってくる。更に新規の文言も見受けられ、このハイブリッド型「女今川」の持つ教訓内容については、その多様さも考慮に入れなければならず、その性格を一括して述べることはできない。

このように「女今川」は、時代の変化によって広範囲化した読み手に合わせて多様なヴァリアントを生み出す、いわば進化する書物であると言えよう。実際、「女今川」には多くの諸本が存在するため、出版時期・地域・型式・商品価値の持たせ方等も実に多彩である。右の『絵本女今川』の如きは書肆の販売戦略の一例に過ぎず、書肆は巷間に多くあふれている「女今川」を販売するためには、本屋仲間内の株に触れないよう配慮しつつも特色を出す必要性があった。このことも本文がほぼ同じながら各々の特色を出す理由の一つである。

### おわりに

従来の研究史では、刊本のみを扱って論じていたため、「女今川」の成立に関する考察の視点が欠けていた。しかし、貞享二年の金沢図本により、「女今川」が近世において書物として商品化される過程への考察が可能となった。

また、「女今川」の二大系統である貞享板と元禄板の詳細な比較検討によつて、おそらくは貞享板を前提とし、その改変を行った沢田きちの改変意図を分析した。沢田きちは、女性の立場に立ち、近世的「イエ」を守る女性としての心得を主としたものへと書き替えを行い、商品性の高い

書物を作り出すことに成功した。これは、「女大学」に見られる同趣旨の書き替えに先行すること、およそ一六年のことである。

他の史料群との比較は今後の課題であるが、現時点では近世の女性作者によるこのような書物の書き替え作業は、画期的な試みであったと言える。従って、「女今川」の「教訓内容が変化しない」とする石川氏の指摘に首肯することはできない。むしろ、きちの「女今川」は、女性の自省・自省する力を前提とした女性主体の教訓を押し出している。後期刊本のハイブリッド型の事例にもみられるように、「女今川」は少ない変化ながらも多様なヴァリエーションをもつ史料群なのである。変化が比較的少ない要因は、「女今川」が「今川状」の權威の上に成立しているためであり、その制約上、自由な本文改編が困難であったことによる。その意味でも「女今川」史料群は、近世社会において可能な限り保存され続けた、いわば限りなく普遍性の高い女性向け書物の代表例と言える。本稿では触れられなかったが、貞享年間〜明治初年の約二〇〇年間にわたり出版され続けた「女今川」は、書物という媒体に限らず歌舞伎や浮世絵など他メディアにおいても取り上げられた。筆者は「女今川」世界の広がり进行分析することが、近世的学びのあり方について考える糸口になると確信している。

先に「女今川」の先行研究として石川松太郎氏の研究を挙げたが、その類型化に見られたような本文内容による分類の再検討からは、歴史的視点は持ちにくい。そこで、試みに本稿の成果を踏まえて新たな類型を考えれば、①初期写本の段階、②初期刊本の段階、③前期刊本の段階、④後期刊本の段階とすべきであろう。①は、「女今川」の成立過程を窺いうる金沢図本のような写本の存在により今後考察の深められるべき分野である。②初期刊本は、貞享刊本及び元禄刊本のような「女今川」挿籃期の作品を指す。③前期刊本の段階に至ると、「女今川」本文はほぼ定着し、付載記事が付き型式が整いだす(正徳四(一七一四)年以降)。④後期刊本は、「女今川」の確立期と考えられる享保一〇(一七二五)年以降夥しく出版されたもので、従来「女今川」のヴァリエーションに加え、そこからの派生作品―対象を芸妓に置き換えた『芸妓女今川』のような―までも含む広い「女今川」を想定する。④については、大量の史料群となるため更に本文系統・書肆別・題簽別といった分析視角が必要となる。

更に、写本「女今川」はその大半が未検討であり、原本の所在把握すら困難である。とはいえ、近世中期の写本「女今川」のように貞享・元禄系本文とは全く異文の本文を持つ固有の「女今川」の存在も知られており、このようなア

レンジは近世を通じ広く行われたと考えられる。固有の写本という書物の使われ方（読まれ方・書かれ方）が刊本世界の広がりと共に、影響を受け存在した可能性も考えねばならない。このような後期写本の検討は、魅力的な今後の課題である。その点も網羅しつつ、地域的な視点を含めた包括的な元禄期以降の「女今川」の系統分析・研究を進めていきたい。

翻刻

（凡例）

- 一、底本は、金沢市立玉川図書館所蔵、『女今川』である。
- 一、適宜改行を行った。
- 一、句読点を適宜補った。

今川になぞらへて女いましめの條々

〔貼紙〕尾坂下松平殿家臣福田平左衛門筆跡

- 一、常の心さし無嗜にして女の道不明事
- 一、若き女無益の宮寺へ参たのしむ事
- 一、小事をも愚にして考なく誹謗する事
- 一、大事をも弁なく我心打解人に語る事

史苑（第七三卷第一号）

- 一、主親の深き恩を忘忠孝疎になる事
  - 一、夫をかるしめ驕に長し天道を不恐事
  - 一、道に背て榮る者をうらやみねかふ事
  - 一、正直にして衰へたるものをかるしむ事
  - 一、あそひに長し或は座頭或見物すき好事
  - 一、短慮にしてしつと心深く人に嘲を不正事
  - 一、女の猿利根に迷万事につき人をそしめる事
  - 一、人の中言を企て愁を以身をたのしむ事
  - 一、道具衣裳己暉麗にして召仕見苦事
  - 一、貴も賤も世のはかなき事を不辯氣隨を好事
  - 一、人の悲を見るを以我知有とおもふ事
  - 一、出家沙門を貴むと言共側近くなる事
  - 一、我が分際を不知或驕あるひは不足の事
  - 一、下人の善悪を不弁召つかひ様不正事
  - 一、舅姑に龜抹にして人の誇りを得る事
  - 一、継子に疎にして他人の嘲を恥さる事
  - 一、男たるには縦親類縁者と言共したしみ過事
  - 一、我に勝れるを嫌己に随ものを愛する事
  - 一、人来る時は其客に對しいかりを移し無礼事
- 右此條々常に女の道静狼かはしくなく嗜事は不珞と言へ共、猶以慎へき事也。先家をまもるへきには、第一慈悲深く正舖心かくへし。

夫天は陽にして強く、地は陰にして和か也。然るに、陰は陽に隨事天地自然の道理なる故に、夫婦の道天地にたとひたれば、夫を天のごとく敬ひ慎むへし。地は天の恵を受けて萬物を生るに より、夫を貴むは、是皆女の孝行の道也。

仁義礼智信の五常有も人の行へき道なれとも、取分まもるへきは、仁の道也。去は、幼きよりやさしき友に交り、假初にも猥かはしき友には近よるへからず。

水は方円の器物に隨、人は善惡の友によると言事寔なるかな。此故に家を能たもつ女は、正しき事を好、家を猥にする女は、惡ならずあやしき事を好よし、人々申傳る也。

日比心に懸、惡きを恥、善にすゝむハ身を治る心さし也。女は家の内を守事なれば其身の行儀作法たゞしく家内の人を能して、和き一族の親しむは、正しき行なるに我身の行い邪にして召仕の者を責るは僻事成へし。

人は五常の理をうけて生れたりと言へとも、或は善となり悪人と成てかはる事、幼少よりの習によるへし。殊に男子にハ師をとり學問を勤させ身を治道を習しむるも有と、女子には教る人稀也。女子は、いくほとなくて他の家にゆき、夫に隨ひ、舅姑につかふまつるへき事なれば、親の本に止るハ暫の内也。然は兼てよめたる道を教なくしては、夫の心に背き一門の恥をならむ事、いかばかり物うかるへし。況や家を治るには朝夕のたしなみ厚く言葉すくなく、正しければ縦まつしきと言とも嘲なし。

猥にはしけなくつたなければ、留ると言とも、心は人には疎れ恥しめらるへし。惣而人の善惡を知り給ふへきには、其人の愛する友を見てしるへし。我にをとれる友を不好は貞女の心さし也。たゞし、かく言へはとて、人を撰み捨へからず。是はあしき友を近つくる事なかれと言事なり。

貴き賤きに不限、衆人愛敬なくしてハ、よろつ調かたく、我心の善惡をためししらんとおもハ、諸人出入有時は、善とおもふべし。また、招共うとみをとつれなき時は、我行正しからずとしるへし。只うき世のなかにすむ者、濁るも、こゝろの測の水の流れにこそとおもひめくらすへし。

あまた人をめしつかふ事、大かた日月の草木国土を照したまふのごとくに、昼夜に慈悲のこゝろをめぐらし、其人々にしたかひ召つかふへし。少の心に油断をして給は、世間の嘲をうくる事、まことに偏に口おしかるへきしたい也。能々慎たまふへし。誠かくのごとし。穴賢。

貞享二年正月日

菖寿重槐三十世入木道相承源成章花押

行年七十一歳

印

印

註

- (1) 若尾政希「書物・出版と日本の社会変容」(『歴史評論』七二〇、二〇〇九年)など。
- (2) 勝又基「『比壳鑑』の写本と刊本」(『近世文芸』七〇、一九九〇年)。
- (3) 藪田貫『女大学』のなかの「中国」(趙景達・須田努編『比較史的にみた近世日本』、東京堂出版、二〇一一年)。
- (4) 小泉吉永『女大学』と柏原屋清右衛門(『江戸期おんな考』五、一九九四年)。
- (5) 石川松太郎『日本教科書大系』一五(講談社、一九七三年、横田冬彦「女大学」再考(『ジェンダーの日本史』下、東京堂出版会、一九九五年)、中野節子『考える女たち』(大空社、一九九七年)。
- (6) 小泉吉永編『女子用往来刊本総目録』(大空社、一九九六年)、『江戸時代女性文庫』全一二冊(大空社、一九九四～二〇〇〇年)、『江戸時代女性生活絵図大事典』全一〇巻(大空社、一九九三～九四年)など。
- (7) 石川松太郎監修・小泉吉永編著、『往来物解題辞典 解題編』(大空社、二〇〇一年)。
- (8) 前掲『女子用往来刊本総目録』を参考に数えた。
- (9) 同右。
- (10) 前掲『日本教科書大系』一五、石川謙『女子用往来物分類目録 江戸時代における女子用初等教科書の発達』(大日本雄弁会、講談社、一九四六年)。
- (11) 前掲『日本教科書大系』一五、二〇・二二頁。
- (12) 筆者の整理による。それぞれ、石川松太郎『往来物の成立と展開』(雄松堂出版、一九八八年、一九二頁。及び同『日

史苑(第七三巻第一号)

- 本教科書大系』一五(講談社、一九七三年)、二〇・二二頁、小泉吉永『往来物解題辞典』(大空社、二〇〇一年)を基に、現在是最古の板を貞享四年板、元禄板との二派に大別されると理解されている。なお、刊本の確認は、小泉吉永『女子用往来刊本総目録』(大空社、一九九六年)に依った。
- (13) 本文については、石川松太郎監修『稀観往来物集成』一三(大空社、一九九七年)。
- (14) 前掲『日本教科書大系』一五、二〇・二二頁。
- (15) 『女用鏡今川』(享保一三年、寺田与右衛門作・板、謙堂文庫所蔵)。
- (16) 『芸妓女今川』(浅野米次郎作、明治一五年、太田活版所、都立中央図書館所蔵)。
- (17) 前掲『日本教科書大系』一五、二〇・二二頁。
- (18) 『女今川』請求番号788.8.20、金沢市立玉川図書館所蔵。
- (19) 寛永四(一六二七)年侍帳、森田平次(柿園)写本(森田文庫K280/4)、石川県立図書館貴重資料ギャラリー(<http://www.library.pref.shikawa.jp/toshokan/dglib/samurai/doc/kanei4/kanei4page15.htm>) 最終閲覧日平成二四年二月一七日。
- (20) 『女今川』(東京国立博物館所蔵、請求番号017-2625-21)。
- (21) 福森平左衛門の地域性については、現時点では未解明だが、「京都カ」とされている(前掲、小泉吉永『往来物解題辞典』(大空社、二〇〇一年))。
- (22) 小泉吉永「女筆の時代と女性たち」(『民衆史研究』七九、二〇一〇年)。
- (23) 前掲『女今川』東博本、一三二丁。

「女今川」 成立考 — 女子用往來の写本と刊本 — (安田)

- (24) また、刊年不記ながら福森屋と菊屋七郎兵衛相板の『女今川』も出版されている。福森屋については、『近世書林板元総覧』(青裳堂書店、一九八一年)、五一—二頁。
- (25) 前掲『女子用往來刊本総目録』一九頁『女今川艶紅梅』(「女用書物蔵版品目」(菊屋七郎兵衛板、宝曆一三年、筆者架蔵)参照。
- (26) 前掲『女今川』東博本、六丁ウ。
- (27) 「女大学」は柏原屋清右衛門により、その初発から商品として制作された(小泉吉永「女大学」と柏原屋清右衛門」『江戸期おんな考』五、一九九四年)。
- (28) 『絵入女今川』(石川松太郎監修「稀覯往來物集成」一三、大空社、一九九七年)。
- (29) 小泉吉永「女筆の時代と女性たち」(『民衆史研究』七九、二〇一〇年)。
- (30) 『女筆四季の友』二冊(『大坂本屋仲間記録』)。
- (31) 『女筆浅香山』(「新撰 書籍目録」)。
- (32) 『お吉ちらし文』、大本一冊(早稲田大学所蔵、請求番号チ 0600491)。
- (33) 小泉吉永報告「女流書家としての居初津奈」(『奈良絵本・絵巻国際会議 神奈川大会』於慶応大学、二〇一二年八月一九日)。
- (34) 前掲『絵入女今川』三九三〜三九八頁。
- (35) 前掲『女今川』東博本、一丁ウ〜二丁才。
- (36) 前掲『絵入女今川』四〇一頁。
- (37) 『今川状』(石川松太郎監修『往來物大系』三四、大空社、一九九三年)。
- (38) 『新女今川』(刊年・書肆不明、香川大学所蔵)。
- (39) 『新女今川姫小松』(正徳四年、西村伝兵衛板、東京学芸大学所蔵)。
- (40) 『女今川ちとせの鶴』(享保一〇〔一七二五〕年、伊勢屋清兵衛板、玉川学園大学所蔵)。
- (41) 『絵本女今川』(刊年不記、永楽屋東四郎ほか、玉川学園大学所蔵)。
- (42) 前掲『女今川』東博本、九丁ウ〜十丁才。
- (43) 前掲『絵本女今川』二三丁ウ〜二四丁才。
- (44) 「女今川制詞条々」(松永六右衛門・篠塚次郎左衛門、正徳二〔一七一二〕年初演)、「泰平女今川」(正徳三年初演)伊達騒動もの歌舞伎の嚆矢) など。
- (45) 「兒女宝訓女今川」(鳥居清長、天明三〔一七八四〕年、中判錦絵、板元・伊勢屋治助)、「風流女今川」(礪川亭永理、寛政一〇〔一七九八〕年、大判錦絵、板元・丸屋文右衛門) など。
- (46) 小泉吉永氏所蔵。  
(本学大学院文学研究科博士課程後期課程)